

# 椎名麟三『美しい女』論

——その主題と構造——

上 田 正

(一)

私は、いまでも、この世の一切の(略)、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、それとたたかい得る光と熱を与えてやりたいと願っている。個人的なものであれ、社会的なものであれ、異常なもの、もうごめん。そして私は、そのことを訴えようと思つてこの手記を書いたのだ。

『美しい女』(昭和三十年五月から同年九月まで雑誌「中央公論」に連載、同年十月、中央公論社より単行本として刊行)は物語結末での主人公・木村末男のこの言葉通り、関西の一私鉄で十年一日の如く、平々凡々と働くこの男が、戦前は左翼運動家の同僚から「臆病」「無自覚」と言われ、戦中は右翼的な彼の妻・克枝から「無関

心」「無責任」と非難されながら、逆に彼らの行動の奥に潜んでいる「悪魔めいたもの」を許してはならないとして、たたかい続けていく物語である。

作者・椎名はこの作品について、久山康氏との対談で次のように語っている。

あの作品の一つの意図はこうだったのです。僕が非合法運動をやっているときに、文学にちょっと接したわけです。それらの小説で非常に前衛的な労働者が取扱われていた。エリートとか、非常に高い意識を持ったインテリが取扱われている。しかし現実には労働者という条件の中で生きている人ではない。(中略)労働者というものはかく生きなければならぬ、こういうふうに生きるのが正しいということを教えてくれるけれども、僕たちの現実

をちっとも知らない。(中略)そういうものへの反感が確かにあって、(中略)それで一度労働者を描きたいと思っていたわけだ。<sup>①</sup>

戦前のインテリ作家によるプロレタリア文学には、現実の労働者の姿が描けておらず、それらはインテリによるインテリのものにすぎないのではないかとという作者自身の生活体験から生まれた不満が、この作品の執筆動機となっている。そして椎名は、現実の労働者の姿を描くために、舞台となっている電鉄会社を<sup>②</sup>何度も訪れ、彼自身がかつて働いていたこの職場で、労働者の感覚といったものを魅らせたのである。

この現実の労働者を描くという作者の企図は、見事に成功している。この作品に高い評価を下す人々も、一樣にこの点をあげており、この作品が昭和三十年度の「芸術選奨文部大臣賞」(文学部門)を受賞した際の受賞理由も、「社会の変動の中に誠実に生きようとする平凡人の原型を平易な文体で見事に描出、戦後文学に新しい人間像をもたらした功績」に対してであった。

しかし、この現実の労働者の姿を描くという企ては、あくまで「一つの意図」であって、作品の主題ではないと思われる。この観点から作品を考察する時、これらの高い評価も、「一つの意図」に

対して与えられたものにすぎなくなってしまうのではないだろうか。また、繰り返し通読する時、主人公が平凡であるかどうか、はなはだ疑問に感じられるのである。

松本鶴雄氏はこの点について、「きわめて形而上的な平凡」<sup>④</sup>(傍点原文)と指摘され、また、「このような凡俗を生きることが実は至難であるが故に逆に異常ですらあり、何か狂気めいてくる。」と述べられている。では一体、作者・椎名がこの一見平凡な労働者の姿を通して描出しようと試みたものは何であったのか、それはどのように作品に形象化されているのか、以下、考察を加えてゆきたい。

① 久山康・編『現代日本のキリスト教』昭和三十六年十一月、創文社。79～80頁。

② 宇治川電気電鉄部(現、山陽電鉄)。椎名は昭和四年～六年、この会社で働いている。「椎名麟三年譜」(佐々木啓一氏作成)による。現代作家人門叢書『椎名麟三』昭和五十二年四月、冬樹社、収録、188頁。

③ 平林たい子、埴谷雄高、臼井吉見氏などが高く評価している。

④ 平林たい子、雑誌『群像』昭和三十年十月。「創作合評―美しい女」埴谷雄高『新選現代日本文学全集』「椎名麟三」解説 昭和三十四年六月、筑摩書房。

臼井吉見『人間と文学』「美しい女」昭和三十二年五月、筑摩書房。

④ 松本鶴雄『美しい女』新潮文庫―解説、昭和四十六年九月、新潮社、247頁。

(一)

主人公・木村末男の勤める私鉄に非合法の共産党による労働組合が組織された時、そうとは知らずに会合に参加した末男は、外部から来た黨員と思われる若い男に、同僚の倉林ともども次のような言葉を浴びせられる。

「あなた方労働者の前には、自由か死かという問題しかないんですよ！ それがわからないなんて……実際、日本の労働者には、あなたのように、曖昧で臆病で卑屈な奴隷根性のものが多すぎる。あなたがたを解放する革命をおくらせているのは、実はあなたのような人々なんですよ！」

また、その若い男は、

「ぼくなんかは、この運動に死を賭けているんですよ！ 死ぬでもいいと思ってるんですよ！」

とまで言い放つのである。それに対して末男は、

「何か現実的でないような気がしませんのや」

と言ひ、同僚の倉林には、

「おれはほんまにきらいなんや、あの、何とか死か、というようなやつは。あんなのん、生活を知らんやつがいうことやおま

椎名麟三「美しい女」論

へんか」

と「力をこめて」言うのである。

椎名はここでこの若い男を「現実的でない」「生活を知らんやつ」と主人公に言わせ、また別の箇所では「はっきり私たちがった階級の男」としてその風体を描出することによって、プロレタリア文学にとどまらず当時の左翼運動のあり方をも批判しているのである。

しかし椎名は、左翼運動そのものを「悪魔めいたもの」としていいのではない。問題は左翼運動に取り組んでいるこの若い男が、その運動に「死を賭けている」「死んでもいい」と言っている点にあるのである。

すなわち、主人公・末男は、自分の生命をも投げ出すというこの若い男に、過度な、行きすぎたものを感じて拒絶反応を起こしているのである、これ以後も△死▽をひきあいに出してくる登場人物には、並々ならぬ嫌悪感を抱いているのである。ここに作者が問題とした「悪魔性」が潜んでいるのであり、この問題は物語の中心である彼と彼の妻との関係において、より一層明確に描かれている。

末男は彼と同じ職場で働く飯塚克枝と結婚するのであるが、まずその結婚そのものが周囲から「過ぎたもの」と言われている。それは克枝が、働き者と評判の女性であり、良すぎる相手という意味で

の「過ぎたもの」なのであるが、末男は「死んでも会社をやめない」という克枝の、その「死んでも」という部分が自分より過度であると感している。そしてそんな彼女に、前述の若い男に対してと同様のいらだたしさを覚えるのであるが、それは彼女の中に「非人間的な恐ろしいもの」を見ているからに他ならない。

このように「うちら死んでも会社のために働こうと思つてまんねやで」とまで言つていた克枝の会社に対する忠誠心は、自分が婦人部長をしている御用組合「曙会」が解散と決つた時、見事に消えうせてしまう。彼女は生甲斐をなくして会社まで休むようになってしまふのであるが、このことから彼女をあれほどまで仕事熱心にさせていたものが、主人公のように仕事そのものではなく、組合といつ一つの組織であつたことが理解できよう。そして、組合の解散から在郷軍人会支部の設置へという出来事が時代の推移によるものだと知つた克枝は、時代というものの力を知り、今度は組織の背後にある時代に忠誠を誓うようになるのである。

この克枝の時代に対する盲信は、彼女の浮気にも明らかである。それは皇道会県幹部で勲六等の勲章を持つ男・清水との浮気であるのだが、彼の持つ時代と結びついた肩書きに魅せられたものなのである。また、天皇夫婦の写真を飾るのも、神棚を作るのも、すべて以前会社に対してそうであつたように、時代というものに対する過

度なまでの忠誠心から生まれたものといえるであろう。

このような妻・克枝に対して末男は、  
「いまの時代、ほんまの時代やあらへんもん、こわい気がするやんや」

と言ひ、また、

「いつの時代でもおれはそうすると思ふんやけど、時代は時代にしてもやで、ほんまの時代やと思つてやらんことにしてるだけなんや」

と言うのであるが、克枝はそんな末男にますますあいそをつかして、「もう、うち、あんたを殺すか、うちが死ぬかやわ」／＼「あんたなんか人間やあらへん。うち、もうあんたを殺すか、自分が死ぬかするよりしようがあらへんのや」

と執拗に言い続けるのである。ここにもまた、主人公が嫌悪する△死▽が顔をのぞかせているのである。

ところが、このように夫に対して反抗的であつた克枝が、一転して「卑屈なほど従順」になる。それは前述の男・清水との浮気現場を末男に見られ、口もきけないほど驚き恐れる克枝を、末男は激怒するどころか全くがめず、逆になぐさめてやるという事によるのであるが、それ以後克枝は夫に対して「罪人のように振舞」いだし、

「あんたはほんまにええひとやわ」／＼「あんたみたいないえらいひ

と、ようけ居はれへんと思うわ」と言い、あげくの果てには、

「あんたは神様でんねん」

とまで言い出すのである。

このように克枝が主人公に対して好意的になったにもかかわらず、末男は彼女に以前同様の「度はずれのもの」を感じ、「またもや危険を感じずにはいられない」のである。

この克枝の態度の変化で明らかなのは、作者が克枝の右翼的な思想を云々しているのではないということである。勿論、前述の左翼青年の場合と同様に、当時の「時代性」というものに対する批判もあるのだが、作者の意図は、常に何かを絶対的なものとして過度の服従に走り、「死んでも」という言葉を口にする妻・克枝に、すなわちそのような人間存在そのものに向けられているのである。

末男はどうすれば克枝とうまくやっていけるかを知っている。それは妻に対して「何かの絶対権をもった時代の権力者となること」なのであるが、これこそが主人公の最も嫌悪することであり、作者・椎名をしてこの作品を書かしたライト・モチーフであるといえよう。それは小説中、次の部分において顕著に描出されている。

私は妻にこのような絶対主義のもつような過度を許してはなら

ないと思っていたのである。何故なら人間らしい人間でありたいと思っている私には、過度というものに於て、人間がそのいい意図にかかわらず人間性を超えて悪魔の顔になるのがわかるからである。／私が、いまでも責任をもって確信することの出来るのは、この世のなかには、唯一絶対の、だからほんとうのものなんかありはしないということである。

以上のような視点から作品を考察する時、今迄述べてきた主人公の妻・克枝や左翼の青年のみならず、この作品に登場する人物の殆んどが、どこか「過度」であり、何かを「唯一絶対」とし、そして△死▽というものにとらわれて生活していることに気づくであろう。「おれ、死んでも、助役の仕事、やりとげて見せませ」と言つて無理をして死んでしまう武藤や、「ヒットラー会」なるものを作つて、

「何かこうほんまのことをやらかしまんねん。死んでもええやうなことを」

と言う飯島、それに発狂する倉林と彼の妹・きみ、自殺する森山、船越、船越の弟など枚挙にいとまがないほどである。椎名はいかに人間が何事かに拘泥し、それを絶対化しやすいか、そしてその結末がいかに悲劇的なものであるかを、主人公を取り巻くこれらの人々

をして、繰り返し描いているのである。

(三)

椎名は『ホントウ』ということ<sup>①</sup>と題されたエッセイの中で、

ホントウというのは、死と関係があるのであります。しかしまた死というものは、人間にとって絶対的なものであるという事実から、ホントウというものは、いつも人間にとって絶対的なものに関係しているということができるのであります。<sup>②</sup>

と「ホントウ」「死」「絶対的なもの」の関係を述べている。そして、

「死んでも」は、ホントウにということであり、「死んでも愛している」ということは、ホントウに愛しているといおうとしているのであり、「死んでもはなれない」というのは、ホントウにはなれない、絶対にはなれないといおうとしているのであることは、もちろんであります。<sup>③</sup>

と、これらの言葉が互いに言い換え得ること、つまり同義に使われていることを指摘しているが、これはそのまま『美しい女』中での

表現にあてはまることである。

また、自殺にもふれて、

とにかく自分の苦しみやら悲しみやらを、ホントウにどうにもならないものだと考えた<sup>④</sup>

ことに原因があるのだとしており、この点から見てゆくと、作中人物の度重なる自殺も当然の結果と言えるであろう。そして椎名は、この問題に対する解決策として、

この世界には、ホントウのものなんていうものは、あり得ないのであります。<sup>⑤</sup>

とする彼の考えから、

何かをホントウのホントウと思っている自分に、ホントウには賛成しないこと<sup>⑥</sup>

が大切であると説いている。

また、「人間の復権」<sup>⑦</sup>というエッセイでは、

対立の一方の項が神聖化されているならば、他の項の神聖をも要求してやるのが、ホントウというものに対するかかわり方だと思われるのであります。<sup>⑧</sup>

と書いているが、これは本論考の冒頭にも引用した、

この世の一切の(略)、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、それとたたかい得る光と熱を与えてやりたい

とする『美しい女』の主人公。木村末男の思いと一致するものであり、作者がこの作品において「ホントウというものに対するかかわり方」を示そうとしていることが理解できるであろう。

このような「唯一絶対の、だからほんとうのもの」などないとする椎名麟三の主張は、〈相対主義〉と呼ぶことが出来よう。この〈相対主義〉という言葉は椎名自身「文学と自由の問題」<sup>⑨</sup>というエッセイ中で用いている名称なのであるが、彼の〈相対主義〉を考えると、その基底となっているキリスト教入信の問題を無視することはできない。椎名はキリスト者となることによって、この〈相対主義〉を自らのものとしたのである。

ここで椎名のキリスト教入信についてふれておきたい。

椎名はデビュー作となった『深夜の酒宴』<sup>⑩</sup>以来、自己の存在の根拠となるべきものを求め続けながら作品を執筆しているのであるが、どこにもその根拠を見出し得ず、深い絶望感から逃れるために、自己をドストエフスキーに賭けるという方法でキリスト教の洗礼を受けたのである。そこには彼が多大の影響を受けたドストエフスキーに対する並々ならぬ信頼や、また洗礼を受けた赤岩栄牧師との関係が窺えるのであるが、洗礼を受けたものの神やキリストが信じられたわけではなく、椎名の回心は洗礼から約一年後、昭和二十六年末のことであり、<sup>⑪</sup>その時点から彼は〈相対主義〉という自己の立脚地を得たといえるであろう。

この椎名の回心が、前述のエッセイや『美しい女』と深い関連を持っていることは、『私の聖書物語』<sup>⑫</sup>と題された、彼の信仰告白の書ともいべきエッセイにおいて明らかである。椎名は自己の回心が「ルカによる福音書」に書かれている復活のイエスとの出会いであったと述べており、復活のイエスを次のように説明している。

そのイエスは確実に死体としてのイエスである。しかしほんとうに死体であるかと言えはそうではない。何故なら彼は確実に生きていくからだ。では彼はほんとうに確実に生きていくかという

とそうではない。何故なら確実にその彼は死体であるからである。つまり彼は、死んでいて生きていたのである。／＼この生と死がたがいにおかすことなく同居しながら、たがいにあわれにも唯一絶対のほんとうのものとなることができないで、しかつめらしくも支えられているイエスの肉と骨とに、私はいままで見たことのない人間の真の自由を生々と見たのであった。<sup>⑭</sup>

椎名が見たものは「矛盾の絶対的な生と死をとともにキチンと共存させている」<sup>⑮</sup>イエス・キリストであったのである。この世にほんとうの解決など何一つないとしながらも△死▽だけをほんとうのものとしていた椎名が、その△死▽すらほんとうのものでないというところを、イエス・キリストによって示されたのである。そしてイエスの生涯を、

人間がほんとうのものと考えるものに対するたたかひにあったというような気がするのである。<sup>⑯</sup>

ととらえ、また、

人間的な一切の事柄というものは、相対的なものであって、唯

一絶対的な「ほんとうのもの」となることができないうのが、イエスの復活の証言である。そこでは、何が嘘であっても、自分の死ぬということだけはほんとうだとしていた死さえもが、絶対的な人間の事実となつてはいないのだ。<sup>⑰</sup>

と述べている。

この椎名のキリスト教入信に対しては、様々な批判が投げかけられたのであるが、その中で佐々木基一氏は次のように書かれている。

わたしは『邂逅』を大きな転機としてそれ以後に椎名麟三のたどりついた、この△自由▽の境地に、いくらかの危惧を感じないではいられない。『邂逅』におけるあのめでたき回心は、(中略)いはば肩の重荷を下ろしていささかくつろぎを感じたとき、それがキリストによって与えられた△自由▽と錯覚されたのではないかという疑念をわたしは拭いさることが出来ない。<sup>⑱</sup>

先に引用した椎名の回心に関するエッセイは、だれもが納得しうるものではないであらうし、彼自身の都合の良い解釈であるとして、佐々木氏でなくとも疑問を感じるかも知れない。しかし、宗教体験というものが、あくまで個人的なものである以上、椎名の信仰につ

いて、あるかないかといった論述を第三者が加えることは出来ないであろう。それはたとえ彼が、「ある教派の方から、キリスト者として認められていない」<sup>⑧</sup>キリスト者であっても同様である。彼の信仰について神学的に考察を加えることがこの論の目的でない以上、彼がキリスト者となり、それによって「唯一絶対の、だからほんとうのもの」などこの世にはなく、全ては相対的なものであるとする世界観の上立って作品を生み出しはじめたことを知れば足りるのである。問題は作者のそのような立脚点が、作品にどのように形象化されているかであろう。それ自体は伝達不可能である自己の宗教体験を、作品においてどのように伝達可能なものとしていくかが、彼によって重要な課題となつたはずである。このような視点から『美しい女』における「美しい女のイメージ」が考察されるべきであらう。

- ① 『生きる意味』昭和三十四年四月、社会思想研究会出版部、冬樹社版「椎名麟三全集」(以下「全集」と略す) 十七巻収録。
- ② ①に同じ。「全集」十七巻330頁
- ③ ①に同じ。「全集」十七巻331頁。
- ④ ①に同じ。「全集」十七巻335頁。
- ⑤ ①に同じ。「全集」十七巻336頁。
- ⑥ ⑤に同じ。
- ⑦ 赤石栄・編、雑誌『指』昭和三十三年十二月号、「全集」十七巻収録。

### 椎名麟三『美しい女』論

- ⑧ ⑦に同じ。「全集」十七巻158頁。
- ⑨ 赤石栄・編、雑誌『指』昭和二十七年十二月号、二十八年九月号、「全集」十四巻収録。
- ⑩ 雑誌『展望』昭和二十二年二月号。
- ⑪ 椎名の受洗が昭和二十五年であり、回心がそれから約一年後であることは、佐々木啓二氏の御研究による。佐々木啓二『椎名麟三研究』昭和四十九年、四月、冬樹社。143～144頁。
- ⑫ 雑誌『婦人公論』昭和三十一年一月、十二月号、「全集」十五巻収録。
- ⑬ ⑫に同じ。「全集」十五巻405頁。
- ⑭ ⑫に同じ。「全集」十五巻406頁。
- ⑮ ⑫に同じ。「全集」十五巻412頁。
- ⑯ ⑫に同じ。「全集」十五巻421頁。
- ⑰ 佐々木基一『戦後の作家と作品』昭和四十二年六月、未来社。
- ⑱ 「自由と共存」雑誌『福音と世界』昭和三十七年九月号、「全集」十巻181頁。

### (四)

主人公・木村末男が思い浮かべる「美しい女のイメージ」は、この作品を論じる時、避けて通ることの出来ない問題である。作品の表題もここから生まれたものであり、三十回近く登場するこの「美しい女のイメージ」がなければ、この小説は成立しない。主人公が充実した毎日を送ることができるのも、また仕事に対して情熱が持

てるのも、全てこの「美しい女のイメージ」に支えられたものとして描かれている以上、このイメージとは何なのか、何を意味するものなのかを説明しなければ、この作品の主題を究明することは出来ないであろう。

斎藤末弘氏は、「全集」第六巻の作品解題において、このイメージのアイデアが、ジャン・ジュネの小説『泥棒日記』からヒントを得たものであり、それは椎名がこの作品中に「美しい自由（＝脱獄）」というルビにつきの一文を発見したことによると書かれている。

椎名はキリストから与えられた「ほんとうの自由」を、この「美しい自由」というジュネの文章から「自由」「女」とおきかえて「美しい女」としたのである。このことについては椎名自身も、第一節で引用した久山康氏との対談において語っており、前節でふれた彼の回心や、『邂逅』『自由の彼方で』などの作品をも考えあわせた時のイメージが「キリストにおける自由」の表現であることは、動かしがたいであろう。

ここで具体的にこの「美しい女のイメージ」を追ってみることによって、この問題を考察してみたい。最初に登場するのは次のような場面である。

私は、そこで焼酎を飲んだのだが、その飲み方も、度をすぎし

たことのない至極真面目なものであった。だが、その焼酎を飲んでいるとき、私の心に痛切にうかんで来るのは、美しい女への思いだった。このようなおかしな自分から救い出してくれる美しい女だった。しかし私は、私の美しい女が、どんな顔をしどんな姿をしているのか、さっぱりわからなかったのである。ただ、美しい女への思いがうかぶと、私の心のなかに、何か眩しい光と力にみだされることだけは事実だった。いわば美しい女というのは、まるで眩しい光と力そのもののような工合だったのである。

物語後半では「美しい女のイメージ」もより明確となり、また思い浮かべる契機となる状況にも共通点が見出されるのであるが、この場面では何故主人公・末男の心に「痛切にうかんで来る」のか全くわからない。何の説明もなく、唐突に登場するこのイメージは、「顔」や「姿」が「さっぱりわからない」のに何故「美しい女」なのかという造型上の矛盾を持ちながらも、そこに人間の意志を超えたものの存在を感じさせている。

このように形而上的な要素が作品中に含まれているのは、椎名の初期作品から最後の長篇となった『懲役人の告発』に至るまで、一貫している構造であるが、特にこの『美しい女』以降、物語の核心に関わる部分に「絶対者」を思わせる象徴を据える傾向が顕著であ

ることが指摘できよう。

さて、主人公はこのような美しい女のイメージを第一章では五度思い浮かべているのであるが、いずれもいま引用した箇所と殆んど変わらず、漠然としたままである。ただ注目すべきは、五度目からこの美しい女のイメージに「ほんとう」という言葉がつけられ、「ほんとうの美しい女」として描かれていることである。以後物語の結末に至るまで、一度の例外を除いて必ず「ほんとうの美しい女」として表現されている。

これは主人公・末男が、「この世のなかには、唯一絶対の、だからほんとうのものなんかありません」と主張していることから考えると大いに矛盾する点であるが、椎名の△相對主義▽がキリスト教の神という絶対者を根拠としていること、そしてこの△美しい女のイメージ▽によって「キリストにおける自由」を表現しようとしたことなどを念頭におくと容易に理解しうるであろう。つまり、ここでこの△美しい女のイメージ▽につけられている「ほんとう」という言葉は、「この世のなか」のもの以外に対して、すなわち神の世界に属するものに対して使われているのである。それは次の場面でも明らかであろう。

勿論、私は相変らず焼酎を飲んでた。焼酎も、そのころ残念

### 椎名麟三「美しい女」論

なことに割当となっていて、その店へは十分に来なかったが、しかし私のあのほんとうの美しい女を生かすのには十分であった。そしてこの私のなかにほんとうといえるものがあるとすれば、それは私のものではなく、彼女に所属するものであることを、あのいささかの悲哀をもってという保留は避けがたいにしろ、だからまたその故に十分に喜ぶことが出来るのである。(傍点引用者)

ここでは「ほんとうといえるもの」が「私のものではなく、彼女に所属するもの」であると、はっきりと書かれているのである。

次に、第三章まで「眩しい光だけで姿の見えない」ものとして描かれ続けていたこの△美しい女のイメージ▽が、第四章にはいると大きな変化を見せている点について言及したい。第四章で最初に登場するのは次のような場面である。

だからひとが、一生不幸だとか、いつまでも不幸だなどというとき、私は、情けなくなつて、当惑してしまふのである。ことにほんとうの労働者だとか、ほんとうの人間の歴史だとか聞くと、私の心のなかに生きてあるあのほんとうの美しい女が、おかしそうに笑い出すのだ。そして私は、その彼女の笑い声が好きなのだ。(傍点引用者)

第三章までは主人公が自分の外部に求めていたこの△美しい女のイメージ√が、ここでは「私の心のなかに生きている」ものであり、「おかしそうに笑い出す」とあるように、表情まで持つようになっていく。

この変化について佐古純一郎氏は、

主人公の心の世界の変化なのか、それとも、作品を書いていくうちに、作者の心の中に深まっていった美しい女への変化なのか、それは作品解釈の上で大変面白い問題をふくんでいるように思われるのである。(傍点原文)

と述べられており、成立の問題として、この小説が第三章までは関西で、第四章が東京で書かれたことを指摘されている。

これは推論の域を出ないかも知れないが、この変化を作者・椎名の信仰の変化として、その表現としてとらえることはできないであろうか。信仰というものが持ち続けていく過程において深まりを加え、日々新たにされていくものであるならば、椎名の信仰も回心直後と『美しい女』執筆時とは同じものではないであろう。また、この作品が書きおろしてはなく、五カ月にわたって雑誌に連載され

たものであることを考えあわせると、この作品執筆中にも何らかの変化があったとも考えられるのである。主人公の求めてやまなかつた△美しい女のイメージ√が、「私の心のなかに生きている」ものとなるこの変化は、自己の信仰がより確固としたものとなってゆく、またそうでありたいとする椎名の思いが、末男に投影され、年とともに明確となっていくというように表現されていると思われるのである。そしてこの△美しい女のイメージ√の「笑い」は、キリストから与えられた「ゆるめ」の表現であると考えられ、前作『邂逅』における主人公・古里安志の「微笑」と同様のものといえるであろう。

このように小説の途中において大きな変化をみせる△美しい女のイメージ√ではあるが、この変化も終始主人公・木村末男一人のうちにおこるものであり、他の登場人物に何ら影響を与えるものではない。彼をとりまく人々との関係に何の変化をももたらさないこの△美しい女のイメージ√は、読者にとってもこれが何を意味するものであるのか、その理解の手掛りとなるようなものを作中に示してはいないのである。

このような△美しい女のイメージ√であるから、評者によって種々様々な解釈がなされてきたのもまた当然であろう。本多秋五氏は、

自由、隣人との和解の気持、恍惚たる至福境など、理想の象徴のようでもあるが、むしろ理想がこの世では到底手のとどかぬものであることを納得させる何かの象徴のようである。<sup>7)</sup>

と書かれているし、十返肇氏は、

「美しい女というのは、誰にでも庶民の中にひそんでいる美しい女への夢ということで、自由の観念の象徴にしなくても、かわないと思うんだよね。(後略)<sup>8)</sup>」

と述べられている。平林たい子氏もまた「何かの夢」<sup>9)</sup>としてとらえられているようである。山田博光氏は、

庶民の描く理想という意味で、プラトンのアイデアのようなものかとも思うが、そうとも断定できない。私はこの原稿を書きはじめる前に、どうしても解釈できず、これを書いている中、絶えず考え続けたが、とうとうわからなかった。<sup>10)</sup>

とその論を結ばれているが、後に発表された『『自由の彼方で』論』においては、

### 椎名麟三『美しい女』論

かつて筆者は、『美しい女』を論じて、その「美しい女」というイメージの真意をはかりかねたが、『自由の彼方で』と対比していえば、「生の意識」特に洗礼を受けた椎名氏に即していえば、キリストによってもたらされた生の意識といってもよい。<sup>11)</sup>

とその論を發展されている。この他、岡庭昇氏や久保田暁一氏、玉置邦雄氏も美しい女のイメージがキリストと結びついたものであると述べられている。

以上のように多様な解釈がなされているわけであるが、この作品は前作『邂逅』のように作中においてキリスト教的な言辞を一切使わず、物語の中心に絶対者を思わせる象徴を据えるという方法で、キリスト者の現実との関わり方、一つの生のあり方を示したものであるといえるであろう。

① 新潮社版全集224頁であると指摘されている。

② ①の①に同じ。76頁。

③ 雑誌『群像』昭和二十七年四月／八月号、「全集」四巻収録。

④ 雑誌『新潮』昭和二十八年五月、九月、二十九年二月号に分載、「全集」五巻収録。

⑤ 昭和四十四年八月三十日「純文学書下ろし特別作品」として新潮社より刊行。

椎名麟三『美しい女』論

- ⑥ 笹刈友一・編『キリスト教と文学』第二集、昭和五十五年四月、笠間書院。佐古純一郎『美しい女』について』175頁。
- ⑦ 『日本の文学』68『椎名麟三、梅崎春生』——解説、昭和四十二年十二月、中央公論社。526頁。
- ⑧ 雑誌『群像』昭和三十五年十月号、創作合評。
- ⑨ ⑧に同じ。
- ⑩ 山田博光『美しい女』論『日本近代文学』昭和四十一年五月号、118頁。
- ⑪ 山田博光『自由の彼方で』論『解釈と鑑賞』昭和四十五年八月号、至文堂。
- ⑫ 『全集』十六巻解説、昭和四十九年七月、509頁。
- ⑬ 久保田暁一『キリスト教と文学』昭和五十二年十月、昭森社。『椎名麟三における神の問題』35頁。
- ⑭ 玉置邦雄『現代日本文芸の成立と展開』昭和五十二年十月、桜楓社『美しい女』の世界——超越的存在者の形象化』113頁。